

4. 資本主義下の農業の特質と結びつく家族経営・労働組織としての農民家族

—現段階におけるその破壊と新しい農民家族の形成—

岩本由輝（山形大学）

私は「日本資本主義と農業」という問題を考えるとき、「資本は農業を苦手とする」ということばが最も端的に現われていると思っています。大体、農業資本主義ということばがありますが、それが典型的に現わされたのはイギリスだけだと思いますし、しかもそのイギリスにおいても農業の資本主義化が達成された時点では、農業は後進国、植民地など、国外の非資本主義的の状況の統一しているところに驅逐されました。これは使用価値目的ではなく、価値目的でもっての生産を推進する資本の論理からすれば、きわめて当然のことでしょう。

ところがイギリス以外の国では、資本主義化が進んでも農業を国外に驅逐することはしませんでした。しかし、そのかわりに農業を資本主義化することはしませんでした。農業を資本主義化しないと

すれば、家族経営ということを基盤とした小商品生産の段階に留めておかざるをえないのです。少くとも明治以降、これまで行なわれてきた日本農業は、そうした資本主義下での農業の最も典型的なものでありましょう。おそらく異論はありますがあえて典型的といわせて貰います。そして、実は常に日本農業と最も対置的なものとされているアメリカ農業も、経営規模という一点を除けば、家族経営そのものです。工業でみられるような資本主義的な経営など、まったく見られません。このことは重要なことだと思います。守田志郎氏の表現を借りれば、とにかく「農業は農業である」のだということになるのでしょうか。

こうなると、農業が農業として続けられる限りでは、家族経営と切り離すことはできないことになると思います。これはおそらく農業法人といったものがうまく行かない大きな原因ではないでしょうか。そうすれば「日本資本主義と農業」ということを問題にするときは、要するに家族経営の歴史を探ればいいということになります。そこではないでしょうか。そこで当然、家族のあり方が問題になります。

しかばは、家族とは何かということになりますが、日本ではムラとかイエということばは要するに歴史上、労働組織を意味するものであるという認識に立てば、資本主義社会において存在する非資本主義的な農民家族もまた労働組織ということになります。そうした労働組織としての農民、家族が、所有主体となったり、経営主体となったり、消費主体となったりするわけですが、自作農の場合

のみ、農業におけるこの三つが一致するわけで、戦前的小作農は所有主体ではあります、また、地主、とくにいわゆる寄生地主の場合は経営主体としての意味が自作農や小作農の場合と違っているはずです。なお、家族が消費主体としてのみしか機能しなくなれば、それは近代労働者家族であり、もはや農民家族ではなくなるわけです。

私は、戦前日本資本主義下の農民家族が、日本資本主義の発展のために意図的に作り出されてきたものであることを、「村落社会研究」第十号所収論文その他で機会あることに主張してきているわけですが、そうした農民家族が資本の蓄積構造にとってその目的とした意味を持ちえたのは昭和恐慌以前においてであります。昭和恐慌によるこうした破綻をきりぬけるためにファシズムへの急激な傾斜と第二次世界大戦への突入がはかられたのであります。

第二次世界大戦による敗戦は日本を大きく変えたといわれます。農村においても農地改革は、いわゆる寄生地主制を根底からくつがえしました。しかし、ほとんどの農民が自作農となるという形での変革は大きくとも、農民家族の経営主体としての規模は変わりませんでした。ただ、これまで小作農であったものが自作農となつたことによって所有と経営の一一致をみながら、ごく単純にいえば旧小作の農民家族にとって所得は倍増したことになります。そして、こうした農民家族の所得の増大の結果、生じた購買力は戦前において狭隘で低賃金労働力の給源として以上に、工業にとってその存在を期待されなかつた農村市場が、なお戦災等によつて極端に低下した生産力水準段階にあつた工業にとって相対的に大きいものとなり、戦

後における資本蓄積の端初（山田盛太郎氏のいう再版原蓄期）において重要な意味をもつたものであります。

そこで村研においては、この時期、すなわち農地改革後の自作農体制下での農民家族の問題をまず一つとらえる必要がありましょう。この間、法制的には家族制度の解体は進められたが、労働組織としての農民家族の解体はほとんど進まなかつたとみてよいでしょう。

つぎに時期的にとらえるべきは農基法下での農民家族ということになりますが、これはいわば日本での農業資本主義化、そして、その結果としての農業の国外駆逐を狙つたもので、高度経済成長政策下での第二次・第三次産業部門での労働力需要の増大と相まって、農業の省力化が推進され、その過程において労働組織としての農民家族の破壊が進められ、出稼ぎ、三チャヤン農業、学家離村、過疎化といった事態が進行したのであります。そして、こうした農民家族の破壊が家族制度の復活をもくろむ政治的勢力によつて促進されたところに、歴史の皮肉といつたものが見出せると思います。

また、近時、農業の見直し、食糧自給率の向上といつたことが、資源問題とからんでいわれるようになつてきましたが、その場合、「農業が農業である」限りにおいて、いかなる農民家族が登場するのか私にとつてもきわめて関心のあることであります。

以上、勝手に書きつづりましたが、私にとって最後にあげた三つの時期の農民家族についての具体的なイメージはまったくありません。むしろ教えて頂きたいのですが、私の方から推せるこの人は、という報告者をみあたりません。その意味で無責任な返事ですが、な

お意のあるところ、お汲みとり頂ければ幸甚と存じます。